

# 家族関係構造の査定法に関する検討

築地 典絵 (tsukiji@hagoromo.ac.jp)  
[羽衣国際大学]

A few remarks on assessment of family relationship

Norie Tsukiji

Faculty of Human Life Science, Hagoromo University of International Studies, Japan

## Abstract

This paper reviewed the present conditions and problems of family assessments from a viewpoint of clinical psychology to support client with problems. As a result of having surveyed studies about family assessment method, it was suggested that the symbol placement techniques (ex. Family System Test, Doll Location Test) that can grasp family relations quantitatively and quality are effective in clinical scenes.

## Key words

family assessment, family relationship, Family System Test, Doll Location Test

## 1. はじめに

システムズ・アプローチは、ものごとをシステムとしてとらえるアプローチ全般を指すが、家族心理学の分野では「家族システム論」にもとづいた家族援助を指している。家族システム論では、家族は一つのシステムとしてとらえられ、夫婦、父子、母子、きょうだいそれぞれ下位システムを形成する。家族は一つのまとまりとして全体が連動することもあるが、下位システムが独立して機能することもある。家族システム論の中では、クライアントをIP (Identified Patient) と呼び、家族という一つのシステムが病理性を持っている場合に、クライアントはそのシステムの中で患者にされてしまったに過ぎないという理論的立場で心理療法を行う。ゆえに不適応に陥ったクライアント (IP) の問題を考える際、クライアントを抱える家族全体の相互作用の中で反復されている情緒的な相互作用のパターンを抽出することが課題となる (亀口, 1997)。

岡堂 (1992) は次のような例をあげて、この家族システム論の視点に立つ家族の病理を解説している。例えば「子どもが引きこもりがちである」という問題を、「母親が拒否的なせいである」と因果的に結論づけるのではなく、「母親が息子に対して批判的になるのは、母親を支配的だと感じる父親が息子を放任することで、母親の権威を間接的に傷つける時である。すると息子は母親よりも放任している父親の味方になるので、母親はいっそう息子に対して厳しくなる」といったように相互関係の循環性に着目し考えていく。前者の因果関係的な病理の解明を「直線的認識論」と呼び、相互関係の中の病理の発見を「円環的認識論」と呼んでいる。

また、クライアントが引き起こす不登校や、非行といっ

た問題行動は、本人はもちろん家族メンバーにも非常に苦痛な体験を強いる場合が多く、症状の解消のための努力は直ちに検討されるべき課題であると考えられる。しかし、クライアントの表す症状には、家族システム内のバランスを維持することに一役かっている場合があり、本人に対し個別に心理治療を実施するよりも、家族の相互関係を修正することの方が即効性があり、クライアントや家族により利益をもたらす場合がある。したがって、家族システム論から見た家族援助では、家族メンバーの相互作用の中から症状を形成しているやりとりの悪循環を見出し、症状を維持させている家族の相互関係を治療者が見極めることが大きな課題となる。

次に、家族療法では家族の相互作用、感情面の関係や脈絡、行動のパターンや過程に注目し、その変化を通じて、問題を解決しようとする。ここで1つ考えておかなければならないのが、家族システムと家族療法との関係である。若島 (2001) は「面接室に家族メンバー全員を参加させる」というイメージは家族療法に対する誤解の一つであると述べており、西村 (1999) も「家族療法は必ずしも、家族全員を面接する必要はなく、面接の形態は必要に応じて変えられる」と解説している。実際にクライアントを援助する際に、クライアントの症状を形成する家族全体の相互関係を理解することは重要であるが、家族の相互関係の見立てに際し、個人が情報提供者となることも大いにありうるのである。

氏原 (1993) は、「場」の考え方を取り入れ、クライアント個人に関わるものが「図」の部分であり、家族の問題が「背景」としてしている。個人が家族の問題につまずくのは、本来背景にあるべきものが図の部分に突出し、場としてのスムーズな相互作用が妨げられているためであると考えられる。先にも述べたが、「家族を一つの有機体としてアプローチする」とことと、「家族メンバー全員を面接する」とことは同義ではない。とすれば、個人療法におい

ても、クライアントが家族の中で担ってきた役割を考慮して家族システムを明確化することは、治療上極めて有益であると考えられる（古宮，2002）。

ところで、家族を心理学的に研究しようとする場合、研究のアプローチとしては、家族内の特定の個人を対象にして個人による情報からその家族を研究していく場合と、家族が一緒にいる場面を観察して家族システム内の関係を解明する場合とがある。両アプローチともに、対象が複数メンバーで構成される家族であるだけに、厳密な実験計画を立て、仮説を検証していく研究の実現は実際的に困難である。実験室研究のように、被験者の条件を統一し、維持することが難しい。また、対照群を設定し、条件を統制して結果を操作することも、倫理上困難を抱える。

家族を心理学的にとらえる方法として実験的手法が適切でないため、従来から、質問紙調査やパーソナリティ検査などを取り入れた調査法と、個人面接や家族療法などの臨床法が一般に行われていた。調査法は家族の心理現象について多数の個人データを収集して、それらを数量的に分析することが可能な「量的研究」に含まれる。実験法とならび、仮説を検証し、データを統計的に扱える点で、実証的な手法であるといえる。しかし、あくまでも個人の視点に立った家族関係認知を尋ねるものであるから、家族メンバー間の相互作用を把握する点には限界があり、また家族関係を言葉で置き換えることの難しさがある。

これに対して臨床法は、個別の事例に対する臨床実践を具体的に記述し把握することによって、症状の意味やその形成過程および変容の可能性を見出すために行われるものであり、「質的研究」に含まれる。とりわけ事例研究は、具体的な事例に即して家族関係や家族システムを研究するという点で非常に重要であるが、解釈が臨床家の主観に陥る危険性や、効果や手法の実証が難しいといった点があり、それを克服する必要がある。

また、家族内の二者間で展開される心理過程の研究は、これまで比較的多く行われており、とりわけ母子関係についての相互作用分析は多くの研究成果が報告されている。しかし、三者関係や祖父母と両親と子どもといった三世代関係を分析するといった研究はあまりなされていないのが現状である（河合，1988；亀口，1992；佐藤，1999）。

以上のような家族研究の問題点を克服するためには、①実証性を確認することの可能な量的研究法の検討、②二者関係以上を客観的に記述できる質的研究法の検討、の2つの課題に対応した家族査定法が必要となってくる。そこで本研究では、近年の家族査定法の発展と現状をふまえながら、家族査定法の特徴、および種類と有効性について検討する。

## 2. 家族査定の現状と視点

### 2.1 家族査定法の現状

今日査定（assessment）は、「病理現象の把握」という観点に重きをおいた心理診断（psychological diagnosis）より、「健康的な面も含めて対象の状況を把握する」という広い

とらえ方がされている（大熊，1988；下山，2001）。また、家族を対象にした査定には、家族内の特定の人間関係に焦点を当てるものと、家族全体やそのシステムを査定するものとの、2種類の方法がある。前者は「IPから見た母」「母から見たIP」といった個人を出発点とし個人に帰結する場合が一般的で、後者は出発点はやはり個人の場合が多いが帰結点が家族全体であることが特徴である。

また、家族査定法は「縦の軸」と「横の軸」といわれる2つの次元からの位置づけが可能である（大熊，1992）。縦の軸は時間に沿った査定で、家族の発達段階の中で、この査定をどう位置づけるのかが問われる。評価のポイントとして遊佐（1984）は「家族の歴史の中で症状はどのように変化したのか」という家族内の歴史、さらには拡大家族内の歴史まで考察することも必要である」と述べている。横の軸は、特定の時点（多くの場合は現在である）における家族構造の状態を把握することである。横の軸に関しては、各研究者によって、評価のポイントの異なる領域であるが、例えばMinuchinのStructural theoryにおいては、「境界」「提携」「勢力」が評価の視点となる（Minuchin，1974）。

井村（2001）は『臨床心理学研究の動向と課題』の中で、1999年から2000年にかけて日本心理臨床学会で発表もしくは機関誌に記載された研究から、研究の種類と方法論的視点からの研究内容を検討した。その結果、事例研究の割合が71%で大半を占め、調査研究の割合が14.5%、心理テストに関する研究が9.1%と極めて少なかったことを指摘した。さらに家族査定となると、知能やパーソナリティなどの査定法に比して歴史も浅く、研究数も少ない。家族を巻きこんださまざまな問題を抱えるわが国において、家族を援助すること、そのための家族査定法の必要性は叫ばれて久しいが、家族関係を査定する方法の問題はまだ不十分だといわざるをえない（大熊，1992；茂木，1994；佐藤，2001）。また、日本の心理査定は世界の1960年代のレベルで止まっているという厳しい指摘もある（丹野，2001）。

このような現状の中で家族査定法を実施する場合、①外国の尺度を翻訳したものを使う、②研究の目的にあわせて独自に尺度を開発する、の主として2つの方法がとられている（大熊，1992）。しかし、外国の尺度（主に米国）を用いた場合、日本の文化や家族関係の実態に即したものではない場合が多く、日本的な家族病理の査定に適しているかどうかは不明である（丹野，2001）。また、独自に尺度を開発するとなると、開発、標準化、臨床適用などを個人で進めるには膨大な時間が必要となるといった難しさがある（丹野，2001）。したがって、わが国の家族文化に合ったツールの開発を視野に入れ、外国の家族査定研究の動向にも注意を払うことがわが国の臨床家には必要である。

臨床的に有効な家族査定法を追求していくに際し、まず、今日わが国で使用されている主な家族査定法の特徴と問題点を概括すると、以下のようになる。

### 2.2 観察法

観察法は、一般的な実験法に比べて拘束が少なく、固定

的な反応様式を課せられることがないため、被験者の自由で自発的な反応が得られる利点がある。また、行動や思考を場面や文脈の中で全体的にとらえようとする生態学的妥当性を重視した方法であるともいえる(塩見, 1998)。家族のやり取りを観察し分析を行う方法の中でも、セラピストが面接中に直接観察を行うものを直接観察法、ビデオなどに家族の様子を収め、後に分析するものを間接観察法と呼ぶ。

また、心理査定法を家族のコミュニケーションに介在させ、そのやり取りを分析する「家族ロールシャッハ・テスト (Family Rorschach Test)」が、Loveland, Wynne & Singer (1963) によって提案された。元来ロールシャッハ・テストは個人の内界の属性を測定するために開発されたものであるのに対し、家族ロールシャッハ・テストはロールシャッハ図版を複数の家族メンバーに同時に実施し、その相互交流を測定する目的で使用される。家族ロールシャッハ・テストはコンセンサス・ロールシャッハ法 (Consensus Rorschach Method) とも呼ばれ、近年の研究においても広く使用されている。

家族ロールシャッハ・テストを用いた面接を行っている馬場 (1989) は、面接過程において「誰が強くて支配権を持ち、誰がそれに従うのか、家族は割れて対立しやすいとか、母親は誰に味方しやすいといった歪みなどが表れてくる」と述べている。しかし、このような観察による家族査定には、家族の表現様式が非常に多様であること、数量化の難しさ、観察者による主観的評価という非客観性の問題を抱える。

### 2.3 描画法

家族ロールシャッハ・テストに類似した査定法として、観察法と描画法を組み合わせた「合同家族描画法」と「家族診断画法」がある。「家族画」が主に IP である子どもの家族認知を対象とするのに対し、「合同家族描画法」には、家族を一単位として扱い、メンバー間の相互交流と葛藤を投影的および行動的にとらえようとする意図がある。したがって、合同家族描画法では、描画を介した家族のコミュニケーションを通して、その家族病理を把握し、家族療法への方向づけを行う。また、家族メンバーが完成した描画について意見を述べ合うことが行程に含まれており、この段階で評価と治療とが一体となって展開されている。

「家族診断画法」は3つの作業(なぐり描き、家族の肖像画、家族の共同作業による壁画)が組み合わされた家族査定法であり、Rubin & Magnussen (1974) によって考案された。個人の描画の状態だけではなく、メンバーの描画に対する反応、描画中のコミュニケーションの偏りも考慮する。合同描画の課題では、家族メンバーに共同作業を要求し、求められた仕事の遂行ぶりが観察される。そこから、作品全体のまとまり具合と、各部を担当した個々のメンバーの参加のあり方が、家族内の親密さや家族の機能する能力を反映すると考えられている。

「動的家族画法」と「円枠家族画法」はクライエント個

人を対象にしている点では、従来の家族画法と異なる点はなく、結果はあくまでも一人のクライエントの内的な家族像を理解するという観点から分析が行われる。

また、描画法の実施の留意点について中井 (1976) や亀口 (1998) は、クライエントの自我状態の脆弱な時は、抑圧していた内的なものが前面に出る危険性があるため、クライエントや家族が嫌がったり、難しそうな様子を示す場合には実施は控えた方がよいことを警告し、描画法の危険性と導入の際の見極めの難しさを示唆した。外林 (1961) によれば投影法としての描画テスト(家族画)は、検査法であると同時に治療法であることが特徴で、ただ何かを診断することに関しては難しいとしている。また、秋谷 (1989) は、「ロールシャッハ法では、反応にならなかった反応から意味と防衛を察知できるが、描画では描かなかったものから、逆に抑圧を読み取ることが困難だ」とも述べている。

### 2.4 質問紙法

質問紙法は最も普及した検査法となっている。その利点としては、実施が容易であること、集団に対して検査できること、検査の解釈に経験を要しないこと、広範囲の内容を盛り込めることなどがあげられる。

FACES (Family Cohesion and Adaptability Evaluation Scale) は、Olson らのグループによって精神的に進められた円環モデル (Circumplex Model) の実証研究の中で生み出された家族機能を測定する自己報告式の質問紙である。家族機能の中心は親密さと適応性によって表現されるとし (Olson, Splenkle & Russel, 1979)、FACES の質問項目もその二次元に対応している。

現在、FACES は、50 項目の FACES II、30 項目の改訂版 FACES II、20 項目の FACES III と改訂が重ねられており、さらに Olson & Killorin (1985) によって観察者による家族相互作用の評定尺度である CRS (Clinical Rating Scale) も作成されている。FACES III は草田・岡堂 (1993) によって日本語訳され、また立木 (1993) は FACES に日本の家族文化にあうように改良を加え、FACES SKG を開発した。

家族アセスメントデバイス (FAD : Family Assessment Device) は Epstein, Bishop & Levin (1978) による家族機能のマクマスターモデル (MMFF : McMaster Model of Family Functioning) をもとに、Epstein, Baldwin & Bishop (1983) によって作成された自己報告式の質問紙である。マクマスターモデルでは、家族機能を課題解決 (problem-solving)、コミュニケーション (communication)、役割 (roles)、情緒的敏感さ (affective responsiveness)、情緒的関与 (affective involvement)、行動のコントロール (behavior control) の 6 つの次元でとらえている。FAD では、これらに一般的機能性 (general functioning) を加えた 7 つの下位尺度で構成されている。日本語版の開発は始まったばかりである。

家族環境尺度 (FES : Family Environment Scale) は、Moos & Moos (1974) によって開発された尺度であり、家族を個々のメンバーにとって環境と位置づけ、家族が集団とし

て持つ心理・社会的特性を、家族メンバーによる認知と評価を通して測定するものである。FESは関係性 (relationship)、人間的成長 (personal-growth)、システム維持 (system-maintenance) の3つの次元からなり、10の下位尺度からなる。内訳としては関係性の次元は凝集性 (cohesion)、表出性 (expressiveness)、葛藤性 (conflict) の3下位尺度、人間成長の次元は独立性 (independence)、達成志向性 (achievement orientation)、知的文化志向性 (intellectual-culture orientation)、活動娯楽志向性 (active-recreational orientation)、道徳宗教性 (moral-religious emphasis) の5下位尺度、システム維持の次元は組織性 (organization)、統制性 (control) の2下位尺度である。日本語版としては、野口ら (1991) によって翻訳が進められているが、表出性と独立性の内的一貫性がそれぞれ0.52、0.34と低いという問題があり、この点は改善が待たれている。

家族アセスメントインベントリー (FAI: Family Assessment Inventory) は西出 (1993) によって開発された尺度である。項目内容はほぼ同一の親用と子ども用があり、「家族内コミュニケーション」、「家族システムの柔軟性」、「家族内ルール」、「家族に対する評価」、「家族の凝集度」の5つの下位尺度からなる。FAIに関する研究としては、学校適応度と家族との関係を調べた西出・夏野 (1995) がある。

以上のここで取り上げた質問紙は、親子関係診断テストのように二者関係を測定するのではなく、「家族全体」を評価することが可能であるという点で、従来の家族に関する質問紙とは一線を画す。しかし、これらの質問紙は「家族全体」をとらえることができる反面、家族の下位システム間の関係を測ることはできないといった制約が生じる。「森は見えても木が見えない」という状況となる。

また、これらの質問紙の大半は、海外で開発され信頼されている尺度を翻訳したものである。FESの日本語版を作成した野口 (1997) は、尺度の妥当性研究の中で、他国の文化を前提に作られた尺度を自国の文化に翻訳することの限界を示唆し、家族の機能は時代や文化との関わりの中で相対的に評価すべきものだと述べている。さらに質問紙法は、被験者が検査の目的に気づき、自分を良く見せる方向に回答したり、自分に障害があるように見せかけたりする場合が考えられるという問題がある。また、質問項目をよく理解できない場合も多く、年齢や能力にあわせて質問項目を改良する必要がある点も問題となる。

## 2.5 問題点と評価対象との関連

上述したさまざま家族査定法を概観してみると、それぞれの検査により、被験者と評価対象が異なっていることに気づかされる。図1にその関係のパターンを図式化した。Aタイプは家族の中の一人が検査を受け、検査の中で家族メンバーを個々に評価するものである。母親の養育態度に関する質問紙に子どもが回答する場合はこれに当てはまる。Aタイプの評価関係では、クライアントの家族メンバーの一人一人への認知は把握できるが、例えば父と母との関係、さらに家族全体の相互関係は見えにくい。Bタイプは

個別面接において、クライアントが家族メンバー全体を一つのまとまりとして評価するものである。家族画、FACESなどがこれに当てはまる。Bタイプでは家族全体の姿が把握できるが、Aタイプとは反対に個人々人への認知が把握できにくい。Cタイプは複数の家族メンバーが面接に参加し、共同で家族を評価するパターンであり、家族ロールシヤツハ、合同家族描画法、家族診断画法がこれに当てはまる。Cタイプでは、複数メンバーの検査への参加といった制約と、解釈の非客観性の問題が生じる。

検査を受けるものと評価対象との関係は、家族査定法の研究の中であまり論じられてこなかった視点であるが、従来の家族査定法の大部分がこれら3つのタイプに分類されると考えられる。

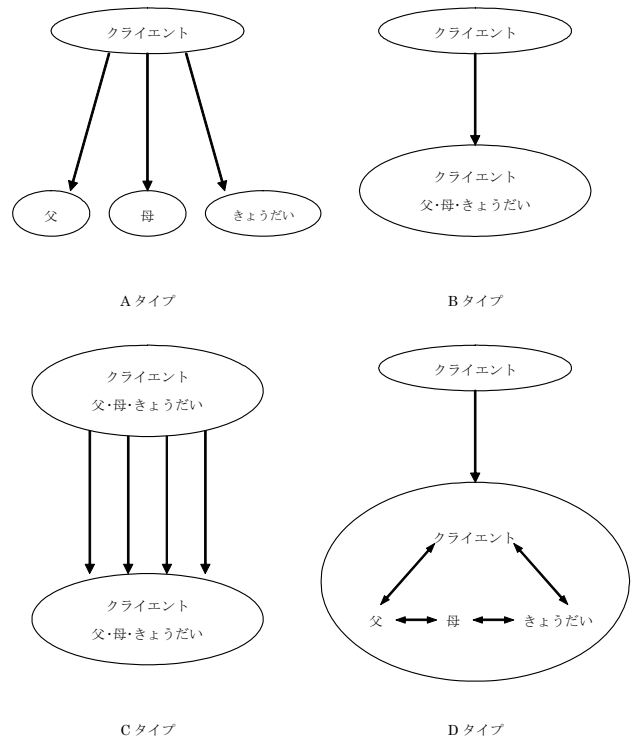


図1：家族評価における被験者と評価対象との関係

## 3. 空間表象による家族査定法

### 3.1 空間に人間関係を投影する試みの変遷

前項で取り上げた家族査定法とは異なり、第4のタイプとして、空間に家族関係やそれを取り巻く人間関係を投影させ、被験者の対人認知を把握しようとする試みがある。これは、Kueth (1962) の Symbolic Figure Placement Techniques (SFPTs) が発端である。以下に、年代を追ってSFPTsの種類と内容を説明する。

Kuethは、対人間の親密さに対する認知「social schemas」を空間的に操作しようとツールの開発を志した。この査定法は、他者に対する好感感情や嫌悪感情などを距離や高さなどを尺度にして空間的に表そうとするもので、同種の査定法を総称するものとして後に Symbolic Figure Placement Techniques (SFPTs) 「シンボル配置技法」と命名された。

Kuethéの用いたテストは、フェルト生地の人型や長方形などの図形を、被験者が自由に粘着性のあるボードに配置していくものである。例えば「男人形」「女人形」の組み合わせならば、どの位置に男性が置かれ、どの位置に女性が置かれる割合が高いのかといった、一般的な対人関係に関する空間認知が調査された。その結果、「女性人形と子ども人形」の距離の方が、「男性人形と子ども人形」の距離よりも短くなっており、Kuethé (1962) は「一般に子どもは父親より母親の近くににいるものだ」という social schemas がシンボルに投影されたと述べている。

その後 Gerber & Kaswan (1971) が、Family Distance Doll Placement Technique (FDDPT) という査定法を開発した。被験者は家族内でどのようなよきごとや悪いできごとがあったかを質問され、その状況を人形を使ってボード上に再現する。人形はチェスと形状が似ており、高さにより人物の年齢が操作できる。この FDDPT では、人形間の距離が短いほど、二者、三者間は親密であるとみなしている。

Madanes (1978) によって開発された Family Hierarchy Test (FHT) も同じく人形を使った査定法である。この査定法では家族の親密さと階層性を評価することができる。Madanes は家族の人形が垂直方向に並べられた場合、一番上に位置している人形が家族の中で最も影響力があり、一番下には最も影響力のないメンバーが位置すると述べている。また家族メンバーの人形が平行に並べられた場合、この家族の力関係には差がないと判断している。Madanes, Dukes & Harbin (1980) が行ったヘロイン常用者や精神分裂病の家族と健全な家族との比較研究では、健全な家族内には親密さと階層性に明確な世代間の境界があるのに対して、臨床群の家族内には世代間の階層性に差が見られないという結果を得ている。

Kvebaek, Cromwell & Fournier (1980) の Kvebaek Family Sculpture Technique (KFST) もチェスのボード上に人形を配置し、人形間の距離によって人間関係を投影させる査定法である。この査定法の理論では、クライアントの「実際の家族」とクライアントが「理想に思っている家族」の姿のギャップの大きさにより、家族病理の高低を診断している。

以上のような、空間にシンボルを用いて人間関係を投影させようとするシンボル配置技法の研究は、まだ数が限られているのが現状である。しかし、この限られた査定法研究の中からシンボル配置技法の有効性に気づいた Gehring (1985) が、上述した査定法に改良を加え、新たに Family System Test (FAST) を開発した。Kvebaek の査定法と同様に、チェスのボードに類似したものに木製の人形を配置する。また、人形の下にブロックを重ねることにより、高さに変化がつけられるようになっている。Family Hierarchy Test (FHT) でも家族の力関係が人形の置き方で把握できるようになっていたが、Gehring はそれを平面から立体に改良し、人形の高さを変えることで、クライアントの感情を無理なく投影させようとした。

またこれらの流れとは別に Doll Location Test (DLT) は、

当時神経心理科に勤務していた八田によって 1977 年に開発された (八田, 1977)。ミニチュアの人形を円が描かれた盤上に配置させ、クライアントの家族を含む人間関係を把握しようとする検査である。人形間の距離は、対人間の親密さを反映するとされている。DLT では、家族以外の人間関係の測定も検査の目的に含まれている。わが国でも早期に開発されたシンボル配置技法であり、現在、関係性を立体的に表出させる技法に限れば、日本独自に開発された唯一の査定法である。DLT は、開発当初から病院臨床、教育現場などで用いられ改良が加えられた (八田, 2001)。

これらのシンボル配置技法を、前節で論じた評価関係の観点から分類すると、4 つ目のタイプ (図 1 の D タイプ) に該当することがわかる。質問紙法の問題点で論じた「森は見えても木は見えない」という問題点は、D タイプで示される評価関係によって克服される。このタイプであれば、クライアントが検査を行う際、家族全体という上位システムとその構成要素である下位システムを同時に評価可能である点で、家族システムの査定法としての有効性は他の 3 つのタイプより高まると考えられる。

以上のように、シンボル配置技法は家族システムを空間に無理なく表現させる工夫が施されており、従来の検査法の問題点を克服する可能性のある技法であることが明らかになった。日本では、外国で開発されたシンボル配置技法の中で、Gehring の Family System Test (FAST) が 1996 年になってようやく導入され、池田 (1996) や Ikeda & Hatta (2001) による国際比較研究が行われた。

なお、こうした査定法とは別に、わが国において「図式法」と総称される査定法の種類がある。例えば、家族構造図 (Family Map) は、Minuchin (1974) によって家族構造を明瞭に示すために考案されたものである。家族構造図では家族関係が①境界線、②提携を中心に記述される。表記はジェノグラムに類似し、例えば家族メンバー間の連携を二重線で、過剰没入関係を四重線で描き入れる。シンボルを用いることにおいては「シンボル配置技法」と共通しているが、検査目的ではなく、家族関係を把握しやすいようにセラピストが作成する点が大きな相違点である。

水島・岡堂 (1980) によって提案された家族関係単純図式投影法は、クライアントが認知している家族関係 (家族の構造や力動) を視覚的に把握しようとするものである。改良が加えられ、現在では通常 B5 判の白紙上に家族と見立てられた直径 12cm ほどの円を描き、その中に一円玉大の円形のコマを用意し、クライアントが自分を表すコマ (円の中心に点が打ってあるもの) および他の家族メンバーを表すコマ (円に“父”、“母”などと描かれたもの) を円内に配置していくというものである (草田・山田, 1998)。その際に①物理的關係 (日常家族がそろうた時の実際的關係)、②現実の心的關係、③理想的な關係について表現していく。そして作品に関してセラピストとクライアント間で話し合うことにより最終的に完成に至る。

亀口・浦部 (1990) による家族イメージ図は、顔を模したシールを家族に見立て紙の上に貼っていく検査である。

シール間の距離は親密さを表し、シールの色の濃淡が影響力の程度を表す。この検査を用いて大学生のアパシーと家族関係を調べた鉄島（1993）は、青年期の女子では母子間の距離が離れるとアパシー傾向が大きくなることを明らかにし、家族イメージ図の有効性を主張した。

家族関係単純図式投影法、家族イメージ図は、円形やシールを操作することによって家族関係を測定することができ、シンボル配置技法と同種の査定法である。

### 3.2 シンボル配置技法に期待される役割

これまでに家族を査定するためのさまざまな家族査定法を紹介し、査定法としての問題点や評価対象との関連を論じた。その中で、家族関係や家族を取り巻く上位システムである人間関係を空間的に表現し評価しようと試みるシンボル配置技法に着目し、他の査定法との違いを記述してきた。

そこで、これまでに取り上げた家族査定法のうち、現在わが国で使用されているものを一覧にまとめ、①「評価対象のバリエーション」の2つの視点と、②「量的研究」の必要性の2つの視点から整理し再吟味した（表1）。この分類票を見ると、例えば家族ロールシャッハや合同家族描画法といった複数の家族メンバーで検査に取り組む査定法を除いて、質問紙法の大半とシンボル配置技法のうちFASTを除いたすべての査定法が個人を被験者としている。また、家族全体か下位システムのいずれかが評価対象となる査定法が多い中、シンボル配置技法は家族全体も下位シス

テムも同時に評価することができる。

計量化の視点から考えれば、観察法、描画法などは結果の計量化に困難がともなう場合が多いといえる。質問紙法は計量化が可能であるのは周知の事実であるが、シンボル配置技法も質問紙と同様にシンボル間の親密さや階層性を数値化することが可能である。このように家族査定法を整理した結果、シンボル配置技法はシステム全体とシステムが内包する個々の関係の両者を評価でき、さらに結果を数量的に取り扱うことのできる点で、他の査定法に比べて優れた査定法であることが明らかになった。またそれらのシンボル配置技法の中でも、DLTとFASTは人形を用い人間関係を立体的に表出できる点、また一度配置したシンボルを容易に移動できるため、試行錯誤しながら配置を決定できる点でとりわけ他の2つの査定法よりも柔軟性に富む査定法であるといえる。今後は、このシンボル配置技法のうちのDLTとFASTの妥当性と有効性の検討が必要になってくると考えられる。

### 引用文献

- 秋谷たつ子 1989 ロールシャッハ・テストと描画テストの併用 臨床描画研究IV、6-15。
- 馬場禮子 1989 ロールシャッハ・テストと家族 家族画研究会編 臨床描画研究 Annex、pp.19-32。
- Epstein, N. B., Bishop, D. S. & Levin, S. 1978 The McMaster Model of family functioning. *Journal of Marriage and Family Counseling*, 4, 19-31.
- Epstein, N. B., Baldwin, L. M. & Bishop, D. S. 1983 The McMaster Family Assessment Device. *Journal of Marital and Family Therapy*, 9, 171-180.
- Gehring, T. M. 1985 *Socio-psychosomatic Dysfunctions: a Case Study*. *Child Psychiatry and Human Development*, 15, 269-280.
- Gerber, G. L. & Kaswan, J. 1971 Expression of emotions through family grouping schemata, distance and interpersonal focus. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 36, 370-377.
- 八田武志 1977 Doll Location Testに関する研究（I）— 精神神経症患者への適用例について— 適性研究第10号、1-6。
- 八田武志 2001 シンボル配置技法の理論的背景 八田武志（編）シンボル配置技法の理論と実際 ナカニシヤ出版、pp.1-18。
- 池田和夫 1996 日本人大学生における家族構造認知の特徴— Family System Testによる国際比較— 高知大学人文学部人文学科・人文学研究4、11-20。
- Ikeda, K. & Hatta, T. 2001 *Perceptions of family structures by Japanese students*. Gehring, T. M., Debry, M. & Smith, P. K.(Eds) *The Family System Test: Theory and Application* Brunner-Routledge, pp.179-193.
- 井村修 2001 臨床心理学研究の動向と課題 教育心理学年報、40、123-132。
- 亀口憲治・浦部雅美 1990 問題を抱えた子どもの家族イ

表1：家族査定法の分類票

テスト法	テスト名	被験者			評価できるシステム		分析
		家族	個人	その他*	家族全体	サブシステム	
観察法	家族ロールシャッハ	○			○		
描画法	合同家族描画法	○			○		
	家族診断画法	○			○		
	動的家族画法		○		○	○	
	円枠家族画法		○			○	
質問紙法	親子関係		○			○	○
	FACES		○		○		○
	FAD		○		○		○
	FES		○		○		○
	FAI		○		○		○
シンボル配置技法	家族関係単純図式法	○			○	○	○
	家族イメージ法		○		○	○	○
	FAST	○	○		○	○	○
	DLT		○		○	○	○
	Family Map			○	○	○	

\*セラピストが利用するもの

- メージにおける特異性 日本家族心理学会第7回発表論文集、pp.31。
- 亀口憲治 1992 家族の心理過程 岡堂哲雄編 家族心理学入門 培風館、pp.25-33。
- 亀口憲治 1997 現代家族への臨床的接近 ミネルヴァ書房。
- 亀口憲治 1998 家族描画法 岡堂哲雄編 心理査定プラクティス 至文堂。
- 河合千恵子 1988 三世代関係～世代間関係への心理学的アプローチ～ 岡堂哲雄編 講座家族心理学6 金子書房、pp.98-126。
- 古宮昇 2002 家族における役割という視点を取り入れた摂食障害事例の考察 心理臨床学研究、19、608-618。
- Kueth, J. L. 1962 Social Schemas and the Reconstruction of Social Object Displays from Memory. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 65, 71-74.
- 草田寿子・岡堂哲雄 1993 家族関係査定法 岡堂哲雄編 心理検査学 垣内出版、pp.573-581。
- 草田寿子・山田裕紀子 1998 家族関係単純図式投影法の基礎的研究IV～家族図式に表現された高校生の家族関係パターンと家族コミュニケーションとの関連～ カウンセリング研究、31、10-18。
- Kvebeak, D., Cromwell, R. & Fournier, D. 1980 *The Kvebeak Family Sculpture Technique: A diagnostic and research tool in family therapy*. Jonesboro: Pilgrimage.
- Loveland, N. T., Wynne, L. C. & Singer, M. T. 1963 *The Family Rorschach: a new method for studying family interaction*. *Family Process*, 2, 187-215.
- Madanes, C. 1978 *Predicting behavior in an addict's family: A communicational approach*. In L. Wurmser (Ed.) *The hidden dimension* New York: Jason Aronson.
- Madanes, C., Dukes, J. & Harbin, H. 1980 *Family ties of heroin addicts*. *Archives of General Psychiatry*, 37, 889-894.
- Minuchin, S. 1974 *Family and Family Therapy*. Harvard Univ. Press. 山根常男訳 1984 家族と家族療法 誠信書房。
- 水島恵一・岡堂哲雄 1980 図式的投影法の総合的研究(Ⅰ) —目的・方法・成果の概観— 日本教育心理学会第22回総会発表論文集。
- Moos, R. & Moos, B. S. 1974 *Family Environment Scale (FES)*. Palo Alto: Consulting Psychologists Press.
- 茂木千明 1994 家族機能査定法に関する研究 —家族円環モデルと日本語版 FACES IIIの関連性について— 家族心理学研究、8、95-108。
- 中井久夫 1976 “芸術療法”の有益点と要注意点 芸術療法、7、55-59。
- 西出隆紀 1993 家族アセスメントインベントリーの作成～家族システム機能の測定～ 家族心理学研究、7、53-65。
- 西出隆紀・夏野良司 1995 家族システムの機能状態が子どもの学校適応感に与える影響に関する一般的研究 家族心理学研究、9、23-34。
- 西村智代 1999 家族療法 氏原寛他編 カウンセリング辞典 ミネルヴァ書房、pp.101-103。
- 野口祐二 1997 FES日本版からみた家族評価尺度の課題 精神科診断学、30、137-145。
- 野口祐二・斉藤学・手塚一朗・野村直樹 1991 FES (家族環境尺度) 日本版の開発～その信頼性と妥当性の検討～ 家族療法研究、8、43-54。
- 岡堂哲雄 1992 家族心理学の課題と方法 岡堂哲雄編 家族心理学入門 培風館、pp.1-12。
- 大熊保彦 1988 家族アセスメント 岡堂哲雄編 講座家族心理学6 金子書房、pp.173-193。
- 大熊保彦 1992 家族関係の心理査定 岡堂哲雄編 家族心理学入門 培風館、pp.227-242。
- Olson, D. H. & Killorin, E. 1985 *Clinical rating scale for Circumplex model of marital and family systems*. St. Paul Minn: University of Minnesota.
- Olson, D. H., Splenkle, D. H., & Russel, C. S. 1979 Circumplex model of marital and family system 1: Cohesion and adaptability dimensions, Family types and clinical application. *Family Process*, 18, 3-28.
- Rubin, J. A. & Magnussen, M. G. 1974 A family art evaluation. *Family Process*, 13, 185-200.
- 佐藤宏平 2001 家族アセスメントの現在 臨床心理学、1、468-475。
- 佐藤眞子 1999 家族関係と家族への心理的援助～家族心理学から～ 中川淳編 家族論を学ぶ人のために 世界思想社、pp.16-28。
- 下山晴彦 2001 心理学アセスメント/異常心理学/ケースフォーミュレーション 臨床心理学、1、830-832。
- 塩見邦雄 1998 人間を測定するとはどういうことか 塩見邦雄編著 心理検査ハンドブック ナカニシヤ出版、pp.1-14。
- 外林大作 1961 性格の診断 牧書店。
- 立木茂雄 1993 *The construct validity of Circumplex Model of Marital and Family Systems (VII): confirmatory factor analytic inter-and intra-cultural cross validation*. 関西学院大学社会学部紀要、67、143-165。
- 丹野義彦 2001 実証にもとづく臨床心理学に向けて 教育心理学年報、40、157-168。
- 鉄島清毅 1993 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の研究— 教育心理学研究、41、200-208。
- 氏原寛 1993 意識の場理論と心理臨床 誠信書房。
- 遊佐安一郎 1984 家族療法入門 星和書店。
- 若島孔文 2001 家族療法の実際～短期療法の文脈から～ 臨床心理学、1、447-452。

(受稿: 2005年5月10日 受理: 2005年5月29日)